シニア海外ボランティア
Fujita Akio

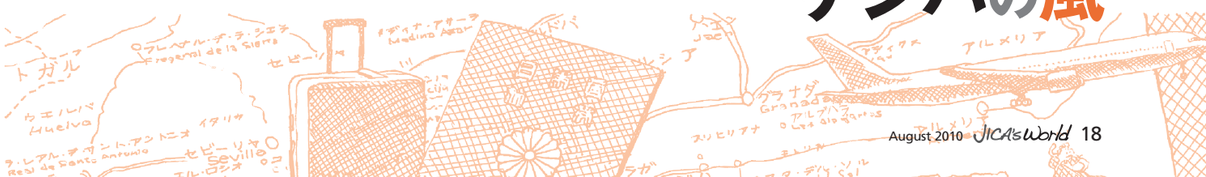
藤田 昭雄さん

アルゼンチンの有名観光地の一つ、ロス・グラシアレス国立公園の観光局出張所を視察する藤田さん。観光客用に置かれている地図や資料を集め、日本人にアピールするためのアイデアを探した

「知られざる魅力を日本人に広めたい」

第二の人生は、暖かい場所で、人の役に立ちながら過ごしたい―。
そんな思いから、シニア海外ボランティアに応募した藤田昭雄さん。
自身がひきつけられた途上国の魅力を日本人観光客に伝えるべく、
“地球に優しい”観光の在り方を模索している。

第17回
ゲンバの風



旅行ガイドブックの編集者からボランティアに

平らで坂の少ないラオスの首都ビエンチャンの町中を、自転車でスイスイ走る日本人―。こんがり日焼けした肌は、思わずラオス人と間違えそうになるくらい、現地になじんでいる。軽やかに自転車から降りて来たのは、シニア海外ボランティアの藤田昭雄さん。2008年1月から、日本マーケットを対象に観光振興に取り組んでいる。

実は彼にとって、ラオスは二つ目の派遣国。ここに来る前は、アルゼンチンのパタゴニアで活動していた。そう聞くと、国際協力一色の人生のようだが、「数年前まで、シニア海外ボランティアの存在すら知らなかったんですよ」と笑う。

会社員時代は、30年間、観光関係の書籍を制作していた藤田さん。「実は、経済記者を目指して入社したんです。旅行が特別好きという訳でもなかったんですが、いつの間にかこの仕事をしていました」。旅行業界の先駆けとなる、旅行ガイドブックの立役者としても貢献した。

〝旅行ガイドブックのプロデューサー〟として生きてきた藤田さんに、転機が訪れたのは退職後。「都会での多忙な生活を終わりにして、健康的な生活を送りたい」と現場を離れて2年、電車である中吊り広告に目が止まった。シニア海外ボランティア―。「こんな制度があったのか」。何か心に響くものがあった。「特に技術はなかったのですが、少し知識のある〝観光〟なら何かできるのではないかと」。すぐに応募を決意し、アルゼンチンに派遣されることになった。

藤田さんが配属されたのは、パタゴニア観光振興機構。ペリトモレノ氷河などで知られるパタゴニアに、日本人観光客を誘致するためのマーケティングを任された。「森や湖、氷河、海岸など、日本の3倍はある広大な土地に名所が点在しています。観光地としてアピールするには、その土地を〝面〟でとらえなければならない。それが非常に困難でした」。

アルゼンチン、さらにパタゴニアとなると、日本からの移動距離は果てしない。観光客を呼び込むには工夫が必要だ。日本の知り合いを頼って、パタゴニアの特集を組んでもらえないかと売り込んでもみた。しかし、出版業界は不況の真っただ中。「関心を示してくれた人もいましたが、最終的な答えは厳しいものでした」。旅行関係のブログやガイドブックに情報を発信したり、現地のウェブサイトの日本語版を作成したりと努力を続けたが、「一年の任期では、思うような成果を上げることはできませんでした」。

ラオスで学んだレスポンシブル・ツーリズム

帰国して1年が経ち、心の底に引っ掛かっていた何かが、藤田さんを再び国際協力の世界に呼び戻した。同じくシニア海外ボランティアとして、東南アジアのラオスに派遣されることになったのだ。「南米よりも過酷なイメージがあったので少し不安でした。でも、未知なる国へ行くという、楽しみの方が強かったかもしれません」。

アルゼンチンにいた時は、「観光振興の〝支援〟とは何か、よく分かっていなかった」と藤田さん。そんな彼に道を示してくれたのが、ラオス旅行業協会で働いている欧米人の同僚だった。「彼らから教えてもらった〝レスポンシブル・ツーリズム〟という考え。単にたくさんの観光客を誘致するのではなく、その土地の環境・文化に配慮しながら魅力を伝え、理解してもらう方法を考えることが大切なんだと気付きました」。

これをきっかけに、藤田さんの活動の幅は広がっていった。現地の旅行関係者との勉強会、ボランティアやスタディーツアーのサポート、日本語ガイド養成講座の新設、ラオス旅行ガイドの日本語版作成…。地方の伝統的な祭りを取材し、日本の旅行業者に記事を提供したりもした。「日本人である私がなぜ途上国で観光振興を行うのか。現地の人に、観光がどう裨益するのか。常にそれを念頭に置いています」。

そして今年2月、藤田さんの活動の集大成となる「第一回ナムグム・ファンライド」が開催された。「ビエンチャンは道が平たんで、サイクリングに最適なんです。ラオスの自然に触れながら、サイクリングを楽しむ。自転車は車と違って環境にも優しい。日本人の仲間と話していて、これだ!!と思いました」。現地で発行している日本語フリーペーパーの編集長をサポートしながらラオス・サイクリング連盟などに企画を持ち込み、1年以上かけて準備。ラオス人、日本人、欧米人など70人近くが参加し、イベントは大盛況に終わった。「毎年続いていくように工夫を重ねたい」と意気込む。

藤田さんが大切にしているのは、目標に行き着くまでのプロセス。「私たちボランティアができることは限られています。たとえ大河の一滴だったとしても、懸命にやっている姿が、現地の人の心に残るような活動をしたいのです」。

いつの間にか、ラオスのとりこになってしまった藤田さん。「何だか肌に合うみたいなんです。もっと住んでいたいくらいです」と目を細める。「残りの人生は、国際協力に捧げたい」。そう言い切る彼の瞳の向こうに、静かな熱い思いが見えた。

「第一回ナムグム・ファンライド」のスタート地点の様子。企画者の一人である藤田さんも参加したが「田園風景を楽しんで走っているうちに、最後尾になってしまいました」

パタゴニア最大の観光資源「ペリトモレノ氷河」。地球温暖化の影響で崩壊が進んでいる

在京ラオス大使館で行われた「ラオス旅行フォーラム」に出張。日本の旅行関係者に対し、日本アセアンセンター総長、ラオス大使、観光大臣と共に、藤田さん（右端）もラオスの観光の魅力をアピールした

ふじた・あきお
1946年神奈川県出身。民間の出版社で旅行ガイドブックの制作に携わる。退職後、シニア海外ボランティアに参加。アルゼンチン（2005年11月～06年11月）、ラオス（2008年1月～10年1月）で、日本人観光客を誘致するための観光振興に携わる。